

受験番号	氏 名	得 点

※ 解答はすべて解答用紙に記入してください。

問題一 次の文章を読んで問いに答えてください。

柿食へば 鐘が鳴るなり 法隆寺（正岡子規）

※ 読みやすくするために分けて書きました。以下の短歌と俳句も同じです。

この俳句をどこかで聞いたことはありませんか。いや、国語の教科書に①のつっていたかもしれませんね。明治の文学者 正岡子規 の句です。病氣療養のため一時帰省していた松山市から東京に帰る途中、奈良の法隆寺に立ち寄ったとき詠みました。お寺のそばの茶店^{ちやみせ}で、奈良名物の、そして、自身も大好物の柿を食べていたら法隆寺の鐘が鳴ったという句です。どうですか。その風景が言葉どおりに浮かんできませんか。言葉による写生のようです。

①奔流のようにヨーロッパの文化が流れ込んできた明治という時代。日本の何もかもがその②渦の中に巻き込まれていきそうになりました。文学も例外ではありません。しかし、消えてはならない日本文学がある。一度消えたらもう帰ってこない。どうするか。そのことを問い続け、これからの日本文学の方向を「文学の革新」として発信し続け、三十五歳で結核に倒れた正岡子規の答えがこの句なのです。

正岡子規は、江戸から明治になる前の年に、四国の現在の愛媛県松山市に生まれました。

子規が生まれた松山市には道後温泉という③名湯があり、古くから遠く海を越えて、都の④高貴な人々も訪ねて来ていました。そのことは、平安時代の⑤げんじ物語にも登場しています。早くから都の文化に親しんでいたのです。また、時代が武士の世の中に移っても松山は学問の盛んな城下町で、芸能や文学を大切にすると⑥気風に満ちていました。⑦能楽、茶の湯、陶芸。文学では、俳諧^{はいかい}（俳句の当時の呼び方）が盛んでお殿様をはじめみんなで楽しんでいました。あの小林⑧いっさもやって来ています。その上、子規の母方のお祖父さんは松山を代表する学者さんでした。子規が文学の道を志したのは自然なことだったのかもしれない。

また、子規の心には、現存する我が国最古の歌集である万葉集のこの歌があったのではないかと私は思っています。

熱田津に 船乗りせむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな（額田王）

まだ日本の夜明けの時代、国の⑦命運を賭けて、天皇が大軍を率いて海を渡り外国に打って出たときの歌です。詠んだのは天皇の歌の代作も務める額田王。「皆の者聞こえるか。わが水軍はここ熱田津で漕ぎ出す機会を満して待っていた。月が出たぞ。潮の流れもよくなった。者ども、いざ、出陣ぞ。」熱田津とは松山だと言われています。

⑦この歌が、若い子規の心に燃え続けていたのかもしれないね。あの時のように。松山から日本文学を守る声を上げるのだ、と。

一心に研究してきた子規は、大学を卒業して新聞記者になりました。自分の考えを世の中に伝えるのにはそれが最もよい方法だと考えたのでしょう。実は、子規には急がなければならない理由もありました。子規は学生時代に結核を④はっしようし何度も⑧咯血を繰り返していたのです。自分の命がそんなに長くないことを知っていたのかもしれない。

子規は「革新」という言葉を使っています。新しくすべきは新しくして日本文学を守る。自分の考えを全国に精力的に発信していきました。

まず俳句の革新を世に発信しました。それまで「俳諧」とか「発句」と言っていたものを「俳句」と改め、「俳句とは言葉による写生だ。言葉で風景を写すのだ。そこに感動が生まれる。」と広く呼びかけます。子規は絵画でも写生の名手でした。

短歌の革新も発信しました。「万葉集に帰れ。力強く⑤そばくに詠むのだ。感動はそこから生まれる。」

文章の革新も発信しました。「自分の思うままを、文章を飾らずに率直に書くのだ。言葉に化粧をするな。」

しかし、病は次第に重くなり、二十代後半からの七年間は思うように体が動かなくなり、最後は寝たきりになります。それでも子規は自分が勤める日本新聞社の新聞に子規のコーナーを設け、記事を自宅から新聞社に送り、毎日全国に発信していきます。

最後の連載コーナーを子規は「病床六尺」と名付け、その⑨冒頭にこのようなことを書いています。

病床六尺（注 六尺とは約一八〇cmほど。一枚の畳の長さ。布団の長さでもある。）これが私の世界である。しかも、この六尺の病床が私には広すぎるのである。手を伸ばして畳に触れることはあるが、布団の外へまで足を延ばして体をくつろぐこともできない。はなはだしいときは極端の苦痛に苦しめられて五分も一寸（注 一寸は約三センチ。五分はその半分。）も体の動けないことがある。

それでも子規は毎日「病床六尺」から発信し続けました。お弟子さんにも熱く語り続けました。すさまじい執念です。「炎の人」と称されるゆえんです。

こうして、子規は三十五歳で亡くなりますが、その最期まで子規を看病したのは、母の八重さんと妹の律さんでした。妹の律さんは離婚をしてまで兄の看病に当たりました。終始穏やかで優しく賢い母の八重さんは、お弟子さんから「ご母堂ぼどう」と呼ばれ慕われました。

あきびより　しき　ははぎみ　き
秋日和　子規の母君　来ましけり（高浜虚子きよし）

子規⑩一周忌法要のときに、お弟子さんの高浜虚子が詠んだ句です。「先生のお母様がおいでになられたぞ。」という分かりやすい俳句ですが、私が子規を思うとき、まずふっと口について出るのは実はこの句なのです。これからの日本文学を世に語り続けた子規の一生が、この句に写生されて見えるのです。

（松山市教育委員会編「伝記　正岡子規」青葉図書）を参考にしました。

問1　問題文中①～⑤の傍線部を漢字で書いてください。

問2　問題文中①～⑩の二重傍線部の読みを書いてください。

問3　問題文の意味段落は四段落です。第二段落と第四段落の書き出し文の第一文節を書いてください。

問4　問題文中に「㊦この歌が、若い子規の心に燃え続けていたのかもしれませんが。」という文があります。子規の心に燃え続けたのはこの歌の中のどの言葉でしょう。書き出してください。

問5　問題文を読んでのあなたの感想を聞きます。心に残ったことを一〇〇字程度でまとめてください。

問題二　次の四字熟語を完成してください。

- ①　一喜　□　　②　□　　東西　　③　心機　□　　④　□　　整然　　⑤　□　　点睛

ア　一転　　イ　古今　　ウ　画竜　エ　一憂　　オ　理路

問題三　次の文の敬語の使い方は適切ではありません。例にならって訂正し、その理由を選んでください。

いらっしゃいました

（例）市長が参られました。　　【イ】

①　先ほど先生が申された件ですが……。　　【　　】

②　それは、私がさせていただきます。　　【　　】

ア　過剰な敬語　　イ　尊敬語と謙譲語・丁寧語の混同　　ウ　その他

問題四　次の短歌は穂村弘の作品です。試合開始前の一瞬をとらえています。あなたにはどんな情景が浮かんできますか。自由に想像し一〇〇字程度で書いてください。書き方も自由です。また、そのあなたの文章に題名を付けてください。

試合開始のコール忘れて審判は風の匂いにめをとじたまま